

いたちかわらばん

通刊31号 鮰川・独川 / 川原番・瓦版 **05 秋号**



(版画 宗森英夫)

(矢沢堀の水車)

矢沢堀の水車

昔から、川の流れを利用して動力を得る方法の一つとして水車があります。いたち川でも、昭和初期までは、数箇所に水車があり、精米や製粉に利用されていたそうです。

現在、矢沢堀（扇橋の水辺の端にある稲荷橋のところ）でいたち川と合流する小川の上流に上の版画のような水車があります。小型なので、単なる飾りか模型だと思っいる人も多いようですが、れっきとした実用の水車です。側にある湿田（日当りが悪いのでセリなどの湿生植物が繁殖している）に水を供給するのが一つの目的です。もう一つは、水を攪拌して、水中に酸素を供給することです。

普通一般には、木製の水車がほとんどですが、この水車はアルミできています。木製だと腐りやすく、鉄製だと錆びやすい上に重いという欠点があります。アルミ製だと軽量なので、わずかの水量で効率よく動かすことができます、しかも、錆びたり、腐ったりすることがありません。

設置されて以来、一日も休むことなく稼働しております。側に観察デッキがありますので、水の力と水の働きを間近で体感できます。

(つむり)

いたち川 OTASUKE 隊 秋の散策報告

いたち川 OTASUKE 隊イベント部では、春と秋の2回現地取材と隊員の親睦を目的に地域の散策を計画しています。今回は“奥鎌倉”にあたる栄区から鎌倉市に向けたハイキングを計画しました。当日は秋晴れのさわやかな1日で気持ちの良いハイキング日和でした。

栄図書館前に集合した参加者は、会員6名と会員の家族や戸塚区、泉区の水辺愛護会の人達9名の参加があり合計で15名でした。

小京都を思わせる“洗井沢緑道”

“洗井沢緑道”に入り“あらはばき祠”で栄区の製鉄の歴史の説明を・・・。

緑道脇の竹林が住宅地に変貌したことには落胆の思いが募りましたが、鎌倉道を忍ばせる点在する道祖神等の石碑を見ながら昔の人々が歩いたであろう“洗井沢アメニティ”を散策し“荒井沢市民の森”へ、荒井沢市民の森の愛護会の草本隊員より日頃のボランティア活動や、森の動植物の生態の説明を受けた。

横浜のグランドキャニオンと言われる“荒井沢市民の森”

皆城山の山頂では、MM21のランドマークタワーや丹沢山系が一望でき、感嘆の声があがっていました。その後、市境の尾根を歩き鎌倉湖（散在ヶ池）へ、昼食休憩を1時間とり、足に自信のない人は、ここで一次解散としました。

鎌倉湖畔に沿って歩き天園ハイキングコースに入り半曾坊より明月院わきを通り北鎌倉へ、計画ではそこから亀ヶ谷切り通しから寿福寺へ行く予定でしたが参加者の希望で解散する事としました。

参加者のアンケートを実施しましたところ、会員以外の中で、OTASUKE 隊とかかわらばんの認識度は5割ですが、ほとんどの人が今後のイベント参加を希望しました。

☆ハイキングの感想

- ・ 解説付きハイキングが良かったことと、ボランティアで自然を守っていることに感心しました。
- ・ 自然の草花に触れ楽しく無事に歩いて良かった。守る



横浜のグランドキャニオン

会の人達の苦勞のたまものと感謝しています。

- ・ 珍しい野草を見られて良かった。愛護会の苦勞話が聞けて良かった。
- ・ 愛護会の人々が木道の修理や草刈り作業をしている見て感心しました。

☆企画について

今回の企画は全ての人が良かったと回答していますが、今後の要望として、

- ・ 春、夏、秋、冬に実施して貰いたい。
- ・ 一般の人の参加を増やすとよいのでは・・・。
- ・ 子供連れで参加出来るよう短時間の企画を。
- ・ 身近なコースで、行程に無理のない企画を。

最後にいたち川 OTASUKE 隊イベント部では、このアンケートを参考にして今後もこのような企画を増やしていきたいと思っています。

いたち川 OTASUKE 隊イベント部委員長
和久井 征治

自然の絵の具で絵を描こう！作品展

いたち川や本郷ふじやま公園で採取した土や葉を絵の具にして描いた約80点の作品を展示します。

【日時】 11月1日（火）～11月13日（日） 9.00～17.00

【展示場所】
あーすぷらざ5階、架け橋（月曜休館）
いたち川沿いフェンス
本郷小学校沿いのフェンス
本郷ふじやま公園国民家内（第一水曜休館）

主催：神奈川県（地球市民かながわプラザ）

共催：横浜市栄区役所

協力：いたち川 OTASUKE 隊・本郷ふじやま公園運営委員会、本郷小学校

発行年月
2005年10月

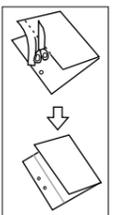
通刊31号

発行：独川OTASUKE隊（いたちがわおたすけたい）

OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係 〒247-0005 横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161 FAX 045-895-2260
栄土木事務所下水道・公園係 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411 FAX 045-895-1421
(お便り・お問い合わせは こちらまで)

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です



いたち川にある様々な魚道

魚道は堰（せき・落差があり、川を堰き止めている堤防）をのぼれない魚のために設けられた通路です。いたち川には、建設され時代や目的の違いから、異なるタイプの4種類の魚道があります。

従来型の魚道（海里橋下流）

海里橋下流の堰（高さ約1.5m）の右岸にある魚道で、幅1.2m、勾配20度で、右下図のように垂直な流れ止めの壁が交互に並び、流れをやわらげると共に、コーナーで魚が休み休みのぼれるように工夫されている。

柏尾川からこの堰の下までボラがのぼってくるが、堰の上流にはのぼっていない。ボラにとっては、この魚道はのぼりにくいのかも知れない。

すり鉢型の魚道（柏尾川といたち川の合流点）

柏尾川といたち川との合流点にすり鉢型の魚道（右上図参照）がある。幅約8m、長さ約10mの馬蹄形で、中央は水量が多く、勾配も急だが、両端にいくにしたがって、水量が少なくなると同時に、勾配もゆるやかになる。したがって、魚の大小や種類によって好きなコースを選べるようになっている。また、斜面のあちこちに大きな石が立ててあり、その蔭のよどみで、魚が休めるようになっている。

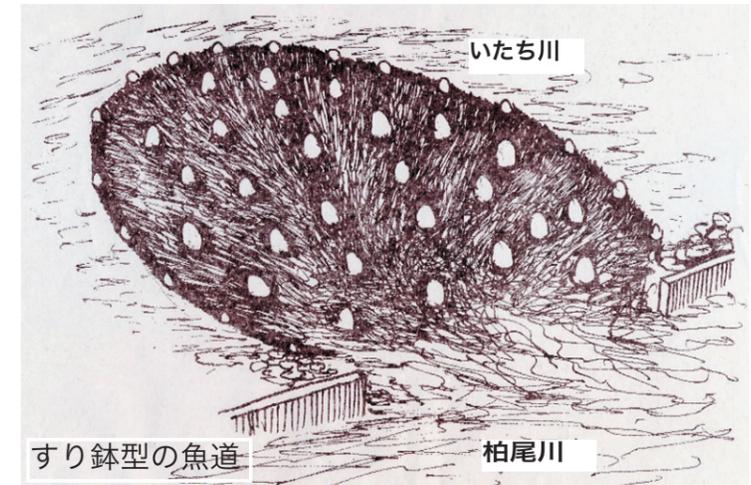
コーン型の魚道（矢沢堀入口・長倉町小川アメニティ入口）

稲荷橋の下流のいたち川と矢沢堀との合流点から10mの区間にコーン型の魚道がある。円錐（高さ80cm、底径60cm）を縦に二つに割ったものを寝せて、交互に並べたような魚道（右下図参照）。

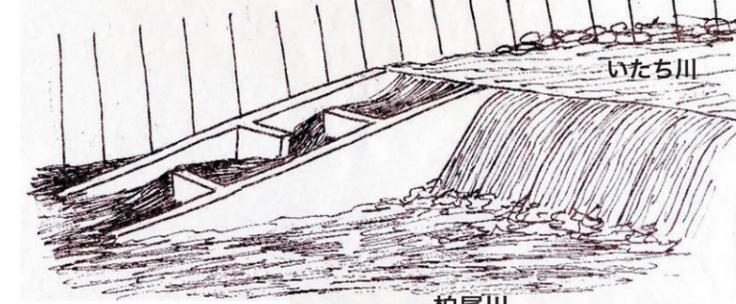
表面がまるいため、水をなだらかに流し、魚が傷つかない。また、水が流れるところと、よどむところができるため、魚は水がよどむところで休みながらのぼることができる。

自然型の魚道（区役所裏のいたちの石像のある堰）

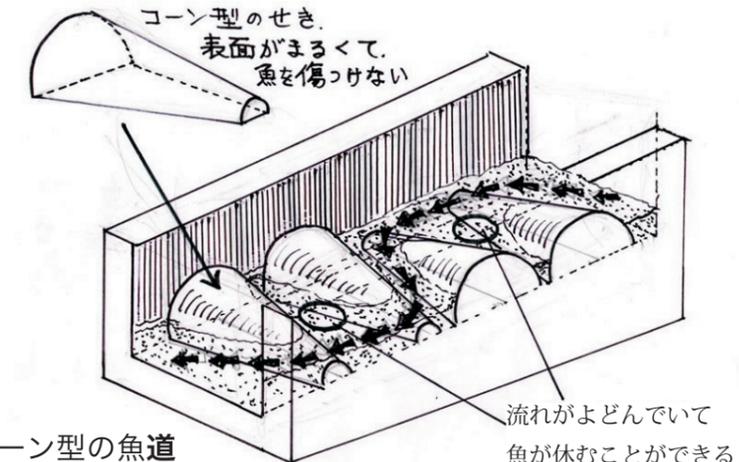
大小の石を積み重ねて造った堰で、一見すると魚道はどこにあるのかわからない。水量の多いところ少ないところ、段差の大きいところ小さいところさまざまな経路があるので、魚は自分の好みや体力に合わせて、のぼるコースを選ぶことができる。



すり鉢型の魚道 柏尾川



従来型の魚道 柏尾川



コーン型の魚道 流れがよどんでいて魚が休むことができる

河川敷は、雨で増水するたびに、地形が変わったり、堆積物が変わったりして、条件が変化するため外来植物が侵入しやすく、いたち川でも多くの外来植物をみることが出来ます。

アレチウリも、その一つで、川原の泥地や土手などに大群生する一年生のツル草です。北アメリカ原産で戦後に日本に帰化しました。

まきひげでからみつきながら、かなり大きな葉を密集させて他の植物を覆いつくし、広い面積を占拠していきます。したがって、アレチウリの近辺では他の植物が育ちにくくなります。

雌雄同株で葉のわきから花序を出し、雄花と雌花をつけます。果実には、柔らかいとげが生え、数個が集まってつきます。花期は七月十月、薄緑色の一センチくらい小さな花をつけます。

(いもり)



「年を重ねただけでは人は老いない。人は理想を失うとき初めて老いる。」われら六十代にとって、石飛さんはシニアのスターである。

(上郷市民の森 森の会 柴田 猛)

「年を重ねただけでは人は老いない...」

石飛孝道さん（八十歳）は尾月町内会では有名人である。毎年初夏の尾月橋の川辺一体は金色のじゅうたんになり、住民やいたち川を歩く人たちの目を楽しませてくれる。

いまやキンケイグクの花畑はいたち川の観光ポイントになった。この花畑を永年にわたり、ひとり黙々と育成している人が石飛さんである。広い花畑の管理は、真夏の雑草取りひとつとってもなみだっている作業じゃないはずだ。橋を渡る住民は花畑の中に石飛さんの麦藁帽子を見つけると、感謝の気持ちをこめて「ご苦労さまです」と声をかける。この秋に、環境美化活動への貢献が認められ栄区シニア連合会より感謝状を受けた。

石飛さんの行動は幅広い。早朝、机に向かい筆で文字を写すのが日課になっている。夏の暑い時期は三時に起き、千字を写すという、書道の達人でもある。午前中畑で農作業していたかと思うと、地域の食事づくりボランティアへ出かけ、夕方は花畑の中へ、その他、森づくりのボランティア活動、町内会のシニアの世話役など、休む間もなく活動している。

当然のことながら、すこぶる健康で姿勢もいい。年を感じさせない見事な体力と自己コントロールである。なによりも強い信念を持って毎日をおくっているように見える。

サムエル・ウルマンの「青春」という詩集が頭をよぎる。

「年を重ねただけでは人は老いない。人は理想を失うとき初めて老いる。」われら六十代にとって、石飛さんはシニアのスターである。

